富士宮市文化財調査報告書第38集

三ッ室遺跡

— 宅地分譲造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2007

富士宮市教育委員会

例　　言

1．本書は静岡県富士宮市小泉字三ッ室における三ッ室（みつむろ）遺跡の発掘調査に係る発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、第一建設株式会社による宅地分譲造成工事に先立ち、静岡県富士宮市小泉字三ッ室1381外で実施した。
3．発掘調査は、開発事業者（第一建設株式会社）との協定をもとに富士宮市教育委員会が行った。調査体制は以下の通りである。

　　調査主体　富士宮市教育委員会　　教育長　大森　衛
　　調査担当　富士宮市教育委員会文化課　学芸員　渡井英誉
　　調査補助員　阿部稔男、勝俣利雄、佐藤法夫、園田　勝
　　調査作業員　渡辺成子

4．発掘調査に係る写真撮影は渡井が行った。
5．本書の執筆および編集は渡井が行った。
6．発掘調査に係る記録図面、写真および出土遺物は、富士宮市教育委員会文化課で保管している。
7．本書で用いる方位は真北を指す。標高は海抜高度を示す。

目　　次

例　言
第Ⅰ章　序　章 …… 1
　1．はじめに …… 1
　2．遺跡の位置 …… 1
　3．調査の経緯 …… 1
第Ⅱ章　環　境 …… 2
　1．地理的環境 …… 2
　2．歴史的環境 …… 2
　3．層　序 …… 8
第Ⅲ章　調査成果 …… 9
　1．遺　構 …… 9
　（1）竪穴住居址（SB01） …… 9
　（2）土坑（SK） …… 11
　（3）ピット …… 12
　2．遺　物 …… 14
第Ⅳ章　総　括 …… 16
　1．発見された遺構 …… 16
　2．発見された遺物 …… 16
　3．遺跡の年代 …… 17
　4．おわりに …… 18
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図 三ッ室遺跡位置図 …… 1
第２図 遺跡分布図 …… 3
第３図 富士宮市南半部の地質と遺跡位置図 …… 3
第４図 周辺地形図 …… 5
第５図 開発対象地区と発掘調査区域図 …… 6
第６図 遺構全体図 …… 7
第７図 調査区標準土層図 …… 8
第８図 ＳＢ０１実測図 …… 10
第９図 ＳＫ２～ＳＫ８実測図 …… 11
第10図 ＳＫ９～ＳＫ13実測図 …… 12
第11図 ＳＫ14実測図 …… 13
第12図 ＳＫ15実測図 …… 13
第13図 出土遺物実測図① …… 14
第14図 出土遺物実測図② …… 15
第15図 丸ヶ谷戸遺跡全体図 …… 17
第16図 丸ヶ谷戸遺跡竪穴住居跡01出土土器実測図 …… 17

挿　表　目　次

第１表 遺跡一覧表 …… 4
第２表 土坑一覧表 …… 13
第３表 遺物観察表 …… 15

写　真　目　次

写真１ 調査区全景 …… 4
写真２ ＳＢ０１ …… 9
写真３ ＳＫ２～ＳＫ８ …… 12
写真４ ＳＫ15 …… 13
写真５ ＳＢ01出土の銅釧 …… 15

第Ⅰ章　序　章

1．はじめに

富士宮市小泉に所在する三ッ室遺跡（第１図）は、富士宮市の南東部にある遺跡で、市内でも遺跡の分布が比較的多い富士根地区に広がる（第２図）。遺跡の発見は、総合的な遺跡分布調査の成果が公開された1979年に古墳時代前期の遺跡として登録されたことによる（静岡県教育委員会1979）。

遺跡は、富士山傾斜地でも比較的広範囲に広がる丘陵部分に位置しており、山麓部においては比較的安定した遺跡経営が図られたものと評価されていた。その中で、発掘調査は、はじめて遺跡に対して本格的に実施されたもので、その性格の具体的な姿を垣間見ることができた。

2．遺跡の位置

三ッ室遺跡は、富士山の麓に広がる緩傾斜地に形成された数多い舌状の丘陵部のひとつに位置している（第２図）。現在の富士山を視覚的に捉えた場合、西南麓～南麓部は、その南端が駿河湾に面し、海岸部から山頂まで一連の地形環境の中で広大な裾部分を形成しており、そこに位置する遺跡は、万葉集の山部赤人の歌で名高い田子の浦から11kmの地点にあり、標高170m程を測る。富士宮市の小泉地区の中でも、三ッ室、大室、神祖などの地名で呼ばれている遺跡群のある一帯は、近年の宅地化が大きく進んだ地区のひとつで、後述する丸ヶ谷戸遺跡などのように宅地造成に伴う発掘調査の実施が大幅に増えている。富士宮市の中心市街地から程近いこの周辺の急速な宅地化は、交通の利便性などが要因となって、遺跡立地の適地においてその進行が進むようになっている。

3．調査の経緯

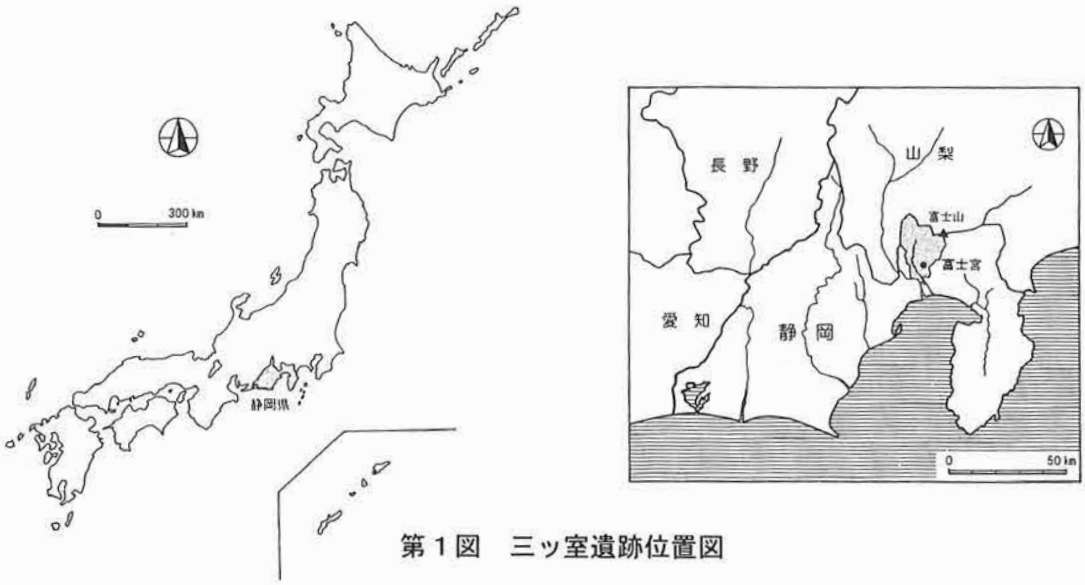
今回の三ッ室遺跡に対する発掘調査は、2006年に計画された宅地造成事業に伴うものである。開発事業地は富士山傾斜地特有の起伏に富んだ地形を示しており、小さな谷筋の形成が想定されるものであった。その環境の中で、現状の地形はそのまま、かつての姿を残しておらず、遺跡立地の詳細な検討の必要が生じたため、遺跡の分布範囲と想定される区域において、遺跡の確認調査を2006年８月30日～９月６日まで5946.7㎡の開発事業対象地に対して実施した。

遺跡本来の分布域の確定と残存状況を把握するための確認調査の成果を受けて、現状で遺跡として残る部分が開発範囲の北西側の一段高い丘陵部分に限られることが判明した。その後、遺跡の取り扱いの協議が持たれ、工事によって、遺跡の保存が不可能となる部分と道路敷設部分に対する発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、2007年２月５日～２月19日にかけて実施している。調査の対象面積は、295㎡を測る。

＜文献＞

静岡県教育委員会1979『静岡県遺跡地名表』



第１図　三ッ室遺跡位置図

第Ⅱ章　環　境

1．地理的環境

富士山の山麓地域は、富士火山の特徴的な多重構造により、各地区でその基盤となる地質環境を違えている（第３図）。富士宮市域の大半は、新富士火山の溶岩流に覆われているものの、その南側は古富士火山の噴出物による扇状地として新富士火山の溶岩流に覆われない部分が認められ、複雑に安居山や沼久保地区まで達するような富士宮溶岩流に代表される新富士火山の溶岩流が古富士火山関連の噴出物に覆われる地域に入り込むような展開を示す。このような富士山山頂を基点とする溶岩流の流れは、富士山の裾を弧状に流れる潤井川およびその沖積地として明らかにされている断層により分断されて、市内の南部に特徴的な星山丘陵などの独立丘陵を形成する。

古富士火山と新富士火山の噴出物による地質環境の違いは、性質の差が作用して、その境界付近に富士山の伏流水を噴出する湧水地を数多く形成する。この湧水とそれを水源とする河川からなる水利面と富士山麓で平坦な面的地形として捉えられる緩斜面地は、遺跡経営の大きな要因となり、市内で一定地域に偏在する遺跡分布として指摘されている。

三ッ室遺跡は、古富士火山の泥流層を基盤とする地域に位置しており、周辺に数箇所の湧水地が認められるとともに、潤井川の支流である弓沢川がその西側を南流する（第４図）。

今回の調査対象地（第５図）は、その東側を三ッ室遺跡とされる範囲内にある神祖湧水地をその水源とする小河川が流れており、遺跡内における水利の利便性をよく表している。但し、この小河川は、ある時点で西から東へ流路を変えることで、遺跡の中を縦断するようになり、長年の浸食作用による地形の大きな改変を進行させている。本来、今回の調査地点と小河川を挟んでその東側の丘陵は一対のものであったが、大きく東西に分断される状況を作り出している。調査区は、その西側にこの小河川のかつての流路としての谷部があり、東側が河川によって分断されることで幅40m程の小さな独立丘陵が形成された場所に当たる（写真１）。

2．歴史的環境

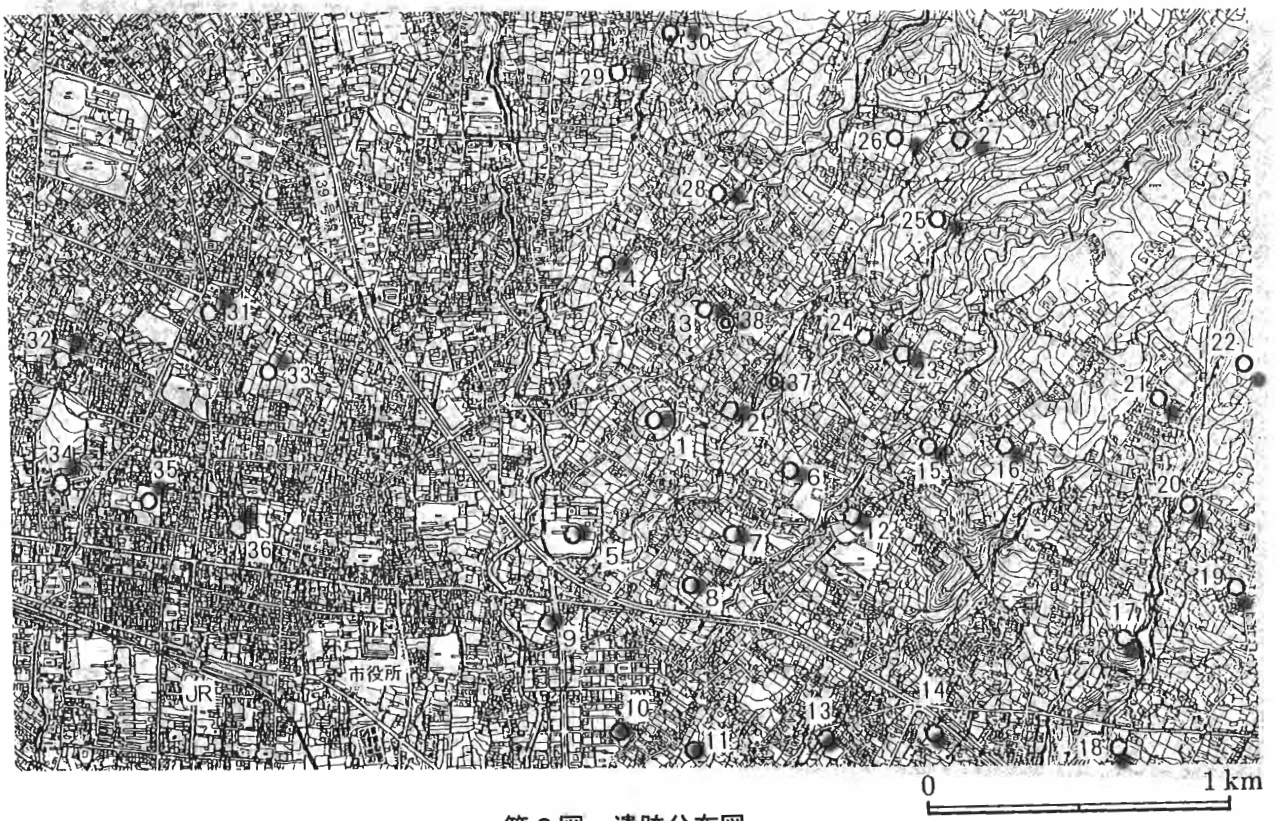
三ッ室遺跡周辺は、比較的遺跡の分布が多く認められる地区である（第２図・第１表）。富士宮市を南北に流れる弓沢川は、地質的境界部分に沿うように位置する（第３図）が、それが遺跡分布の範囲を規定するものともなっている。弓沢川を挟んで東側区域は、遺跡の分布域として確認されるのであるが、その西側ではその形成は認められない。それは、潤井川扇状地内の微高地にある浅間大社遺跡（32）や大宮城跡（33）などの神田川や潤井川で形成された低湿地に依存する遺跡群の領域まで空白地として認識される。

弓沢川以東の遺跡分布域は、若宮遺跡や代官屋敷遺跡（14）、丸塚遺跡（19）などの縄文時代早期の遺跡をその嚆矢として遺跡経営が始まる。これらの遺跡は、遺跡分布域である富士根地区に対してややその東側に偏在して、ジゲンジ沢や天間沢沿いにその出現が知られるものである。

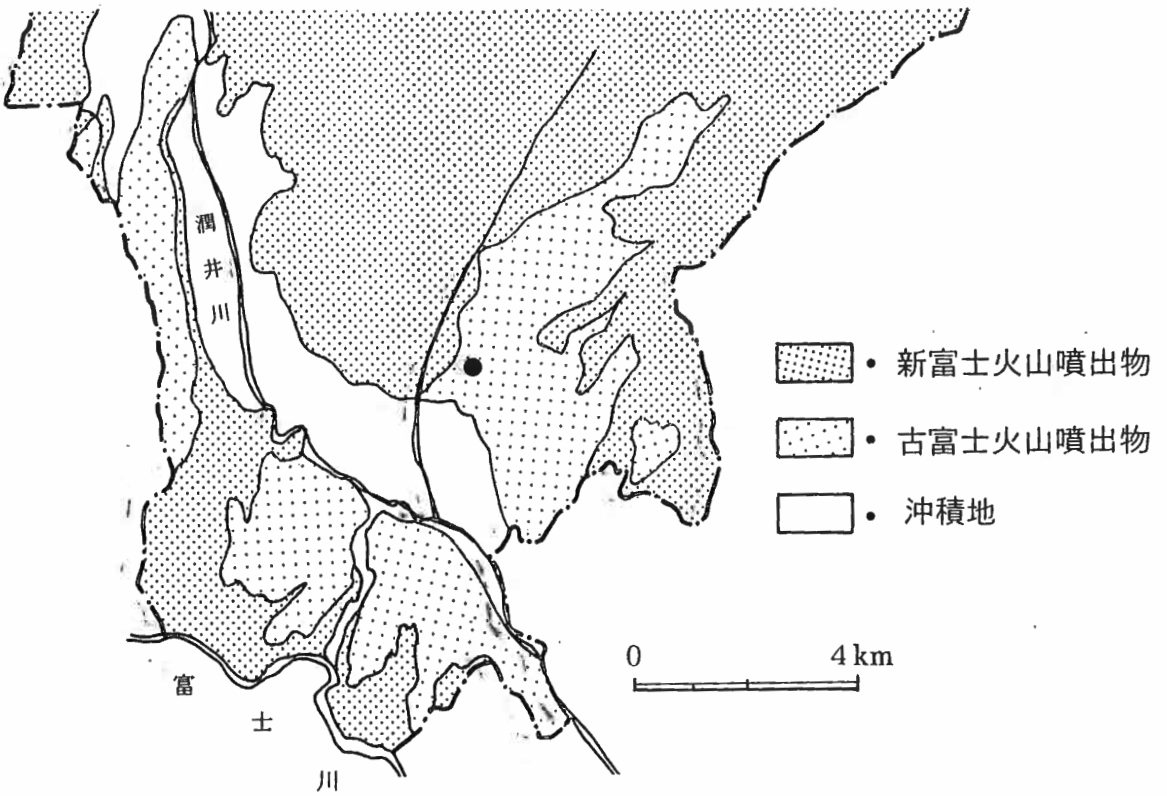
今回の調査で特に着目されるのは、弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡の動向である。

弥生時代は、中期前葉の丸子式土器併行段階の渋沢遺跡などが潤井川中流域に分布するが、沖積平野に対する依存が弱く、富士山西南麓の山間地に点在している。生業の面で採集経済に対する指向が大きかったものと考えられる立地環境を示している。

弥生時代の遺跡造営が本格化するのは、その後期からで、集落遺跡として発見されている遺跡が多い。星山丘陵では、月の輪上遺跡や下ヶ谷戸遺跡での集落遺跡が調査され、丘陵北端に近い部分では、滝戸遺跡や大中里坂下遺跡、潤井川を挟んで対岸の沖積地内では泉遺跡がそれぞれ調査されている。滝戸遺跡では弥生時代後期後半の方形周溝墓群が発見されており、泉遺跡では後期中葉の環濠が発見されている。



第２図　遺跡分布図



第３図　富士宮市南半部の地質と遺跡位置図

第１表　遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代	標高	備考
1	三ッ室遺跡	集落跡	縄文(中・後)、古墳(前)	155	今回調査
2	神祖遺跡	散布地	縄文(中・後)、古墳（前）	165	
3	大室遺跡	散布地	縄文（中・後）	170	
4	丸ヶ谷戸遺跡	集落跡	古墳（前）、中世	175	前方後方形周溝墓
5	木ノ行寺遺跡	集落跡	古墳（後）	140	井泉跡
6	寺ノ後遺跡	散布地	縄文(中)	170	
7	寺内遺跡	散布地	古墳（前）	150	
8	小泉中村遺跡	散布地	縄文（後）、古墳（前）	140	
9	中沢遺跡	散布地	古墳（後）、奈良	120	
10	向田遺跡	散布地	古墳（前）	115	
11	上石敷遺跡	集落跡	縄文（中）、古墳（前）、奈良	120	古墳時代前期区画溝
12	小泉向原遺跡	散布地	縄文(中)	160	
13	中ノ土手遺跡	散布地	縄文(中)、古墳(前)	125	
14	代官屋敷遺跡	集落跡	縄文（早・中・後）	155	
15	出水東遺跡	散布地	古墳（前）	185	
16	金井坂遺跡	散布地	縄文(中)	200	
17	杉田西原遺跡	散布地	縄文(早・中)	180	
18	大宝坊遺跡	散布地	縄文(中)	150	
19	丸塚遺跡	散布地	縄文（早）	200	
20	新梨遺跡	散布地	縄文(早・後)	210	
21	大辻遺跡	散布地	縄文(中)	225	
22	田上原遺跡	散布地	縄文(中)	255	
23	出水遺跡	散布地	縄文（早）	185	
24	出水西遺跡	散布地	古墳（前）	185	
25	滝沢遺跡	散布地	縄文	230	
26	箕輪Ａ遺跡	集落跡	縄文（中・後）	220	
27	箕輪Ｂ遺跡	集落跡	縄文(前)	220	
28	峯石遺跡	集落跡	縄文（前）、奈良	180	
29	時田遺跡	散布地	縄文（後）、古墳(前)	190	
30	辰野遺跡	散布地	縄文（晩）、古墳（前）	205	
31	城山遺跡	城館跡	中世	150	
32	二ノ宮遺跡	散布地	奈良	140	
33	若ノ宮遺跡	散布地	古墳（前）	140	
34	浅間大社遺跡	神社	平安、中世	120	中世居館・神社
35	大宮城跡	城館跡	平安、中世	130	中世居館
36	連雀町遺跡	散布地	弥生(後)、古墳(前)	130	
37	神祖山ノ神号墳	古墳	古墳（後）	175	
38	大室古墳	古墳	古墳（後）	170	

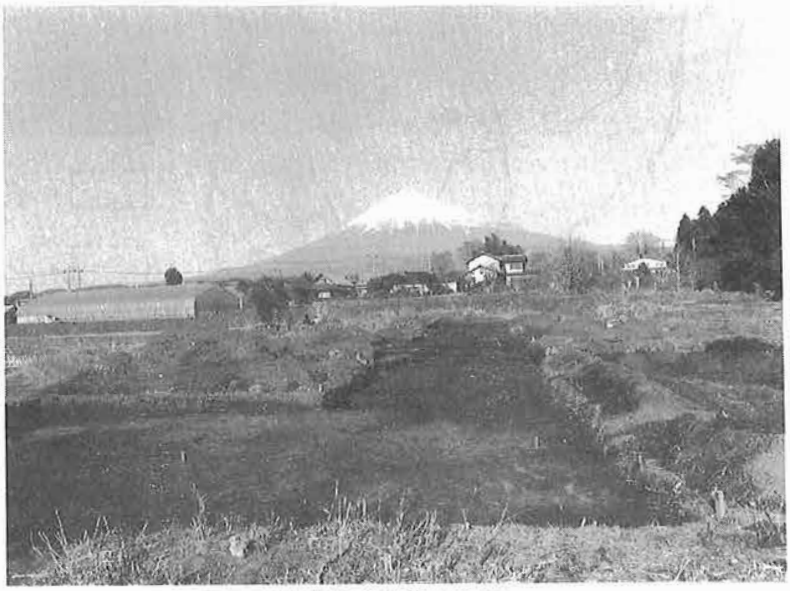
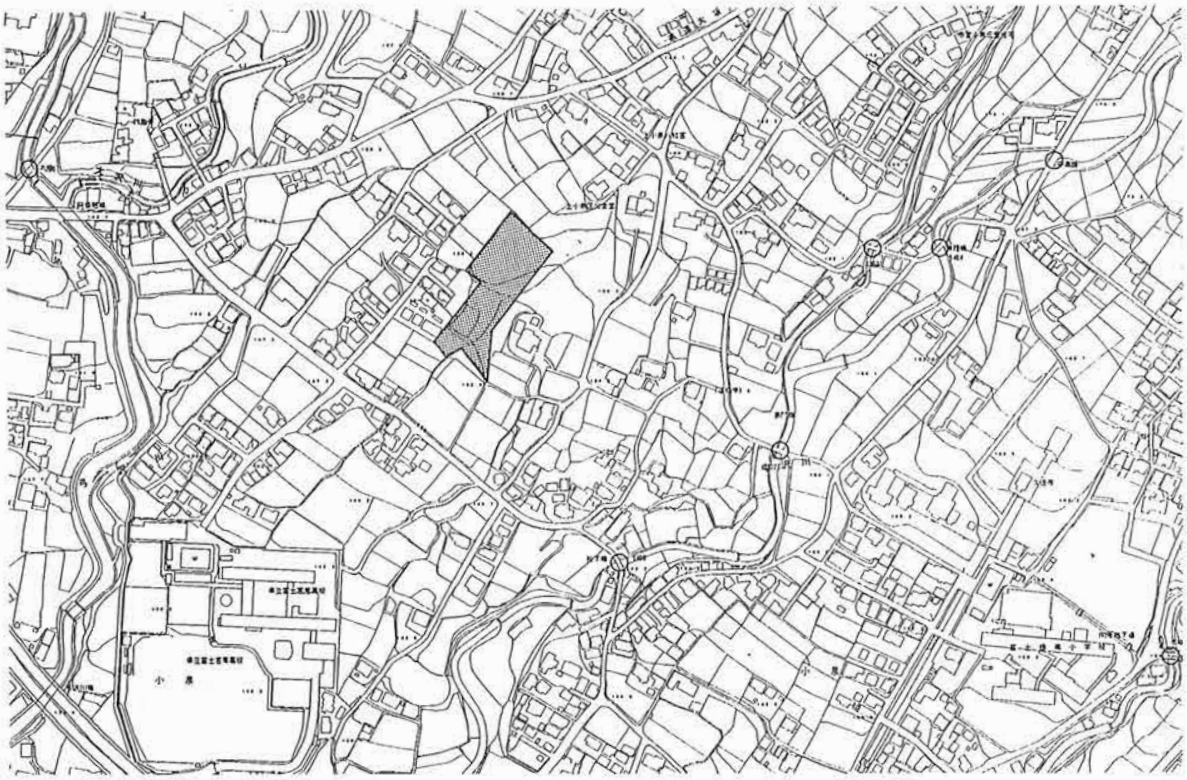


写真１　調査区全景



第４図　周辺地形図

三ッ室遺跡周辺では、同じ弓沢川の下流域に石敷遺跡の進出が確認され、集落が発見されている。現状で、富士山傾斜地はこの遺跡だけであり、潤井川に程近い富士山傾斜地の裾部分に位置している。

この段階の遺跡の動向は、沖積地内の微高地に泉遺跡の進出がその魁として、以降、星山丘陵と富士根地区へとその広がりを示す。この実態は、駿河湾沿岸域でも普遍的に見られる動向であり、海岸部から丘陵部への遺跡の分布主体の変化が指摘される。

古墳時代前期では、遺跡の増加がその分布状況から認められものであるが、その内容も特徴的な変化を示す。

古墳時代前期前半の遺跡としては、星山丘陵で、月の輪平遺跡、滝戸遺跡などが主な遺跡として確認され、滝戸遺跡と近接する泉遺跡での経営も見られる。この周辺は、弥生時代後期の遺跡分布域を踏襲する状況が指摘されえるものであり、継続性の強い遺跡群としても捉えられる。

富士山側の富士根地区では、継続的な遺跡造営の跡は追えない。石敷遺跡の集落は、後期の段階で消失しており、古墳時代まで続かない。この富士根地区では、古墳時代になると新たに遺跡が登場するのである。全長26mを測る前方後方形周溝墓が発見されている丸ヶ谷戸遺跡(4)を始めとして、神祖遺跡(2)、木ノ行寺遺跡(5)、寺内遺跡(7)、弥生時代集落と地点を大きく違えた石敷遺跡などで古墳時代前期前半の遺跡経営が始まる(富士宮市教育委員会1993)。上石敷遺跡(11)では、この段階の区画溝を持つ集落遺跡が調査されている（富士宮市教育委員会1985)。

これらの遺跡は、弓沢川左岸域の幅１kmの範囲に集中するような分布を示しており、一定の範囲に規制されたような状況の中で展開している。この分布域の中で最も下流域で調査されている上石敷遺跡では、竪穴住居址からなる集落遺跡が発見されている。また、最も上流域にある丸ヶ谷戸遺跡でも竪穴住居址が発見されており、居住域としての集落遺跡が確認されている。但し、丸ヶ谷戸遺跡の居住空間は、短期間で消失し、前方後方形周溝墓を含む墓域として利用されるようになる。このように、古墳時代前期前半の遺跡は、その数

に較べ、竪穴住居自体の発見数は少ない。今回の三ッ室遺跡は、同時期の遺跡であるとすると竪穴住居跡の発見遺跡として、この地区で3例目となる。

古墳時代前期後半の遺跡は、その数が減少する傾向にある。星山丘陵では、月の輪平遺跡周辺での継続が確認されている。また、滝戸遺跡においては、方形周溝墓（方墳）が調査されている。大中里坂下遺跡や牛ヶ沢遺跡では、この段階の遺物が採集されている。このように、遺跡造営の立地環境が作用して、集中する分布域が古墳時代前期後半まで継続するのが、星山丘陵における遺跡群の傾向であると言える。

富士山側の富士根地区では、各遺跡が古墳時代前期の前半を以ってほぼ終焉を迎えて、後半段階の様相は明らかではなくなる。古墳時代前期後半で遺跡分布が確認されているのは、辰野遺跡（29）、箕輪A遺跡（25）などの、富士根地区でもやや標高の高い場所に分布する遺跡においてであり、この時期の遺物が採集されている。また、富士根地区でもその西端部から富士市天間地区にかけて、数棟の竪穴住居で構成される小規模な集落遺跡として、若宮遺跡や富士市天間沢遺跡などが発掘調査されている。

富士宮市街地にある浅間大社遺跡（32）、大宮城跡（33）でもこの段階の資料が発掘調査で出土しており、地域で遺跡分布の分散する様子が窺えるようになる。

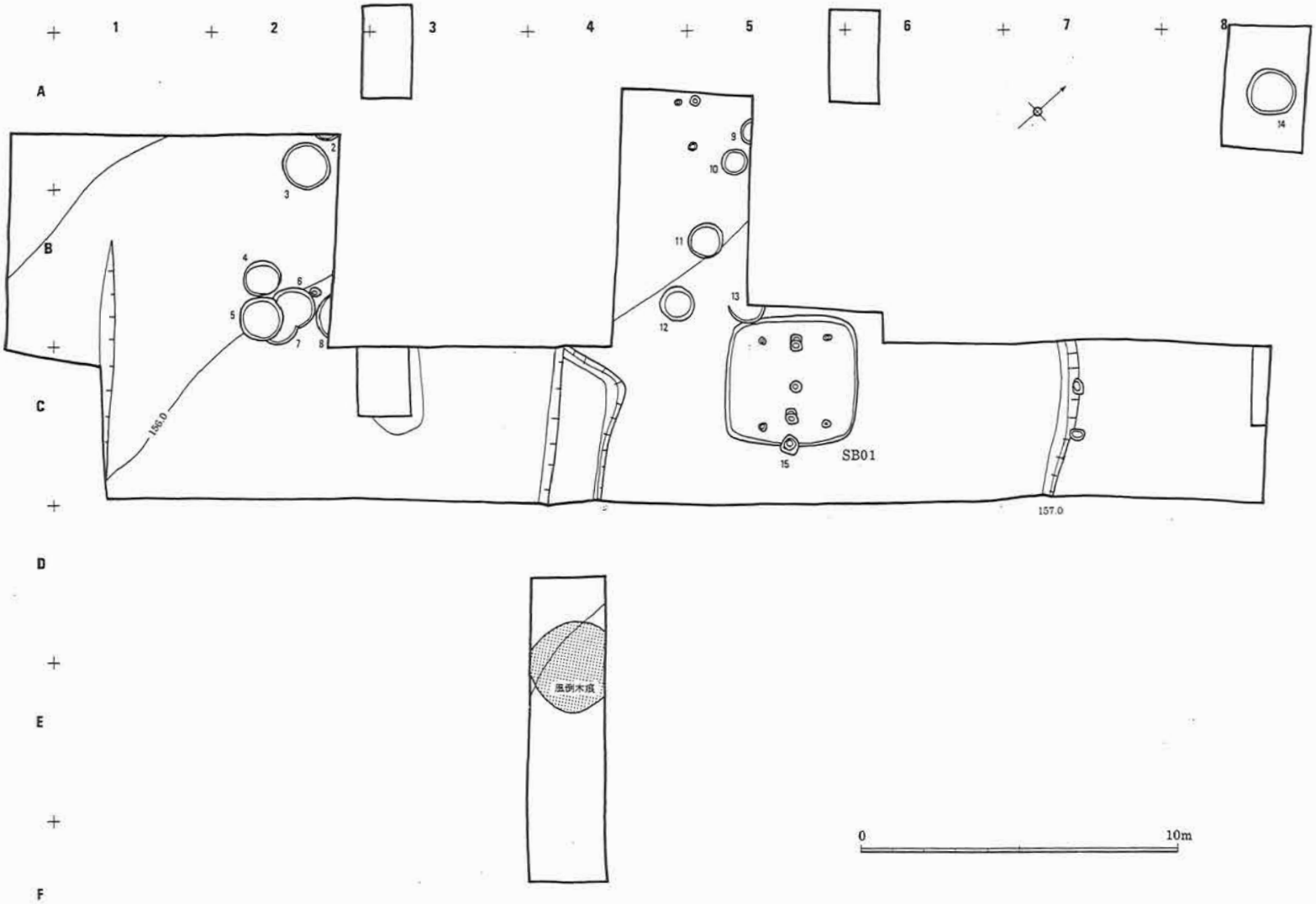
古墳時代前期の遺跡は、羽鮒～星山丘陵における継続性と富士根地区を中心とした富士山側の地域における断続性として認識され、遺跡の動向の違いが指摘されるものである。そして、これらの古墳時代前期の諸遺跡は、ほぼ、この前期段階で消失し継続していない。

富士山西南麓において、再び遺跡の登場が認められるのは、上石敷遺跡(11)や峯石遺跡(28)で発掘調査されている奈良時代前半の集落においてである。これらは、継続性が弱く、竪穴住居が散在する状況で発見されている。

平安時代の後半～中世にかけて、浅間大社遺跡(34)、大宮城跡（35）などを拠点遺跡とした遺跡分布が認められるようになり、遺跡経営が新たな展開を示すようになる。この段階は、中世居館が発見されている大宮地区を地域の中核として、その周辺域に広がる丸ヶ谷戸遺跡（4）で墓跡と道跡、石敷遺跡で竪穴状遺構と道跡がそれぞれ発見されている。

このような、断続的な遺跡造営の変遷は、この地区ばかりではなく、富士山西南麓地域に共通する動向である。そこには、富士山の噴火などによる自然環境等の変化が大きな要因となる遺跡分布の様子が窺えるのである。

第5図　開発対象地区と発掘調査区域図



第６図　遺構全体図

3．層　序

今回の調査区における標準的な層序（第７図）は、調査区が南西側に向かって徐々に傾斜する丘陵の縁辺部に位置しているため、弥生時代以降の遺構検出の鍵層である大沢ラピリ層が標高の減じている点を特徴とする。大沢ラピリ以下は、黒色土（クロボク）、栗色土、黄褐色土となる標準的な堆積を示している。これらは、縄文時代の遺物包含層となるものであるが、確認調査において、明確な縄文時代遺物の出土は見ていない。

大沢ラピリ層は、地形に沿って全域でその堆積が認められるものである。ただし、後世の畑作による地形改変や事業対象地南西側一帯の河川の侵食などにより、消失している部分が大半を占めている。なお、河川部分においては古富士火山による泥流層の露呈が認められ、一帯に大型礫の分布が見られる。

今回、確認している調査区の標準的な土層は、以下の通りとなる。

第１層．表土

第２層．表土（旧耕作土）

第３層．黒色土

第４層．黒色土

第５層．黒色土

第６層．黒色土（大沢ラピリ漸移層）

第７層．黄褐色土（大沢ラピリ層）

第８層．黒色土（クロボク層）

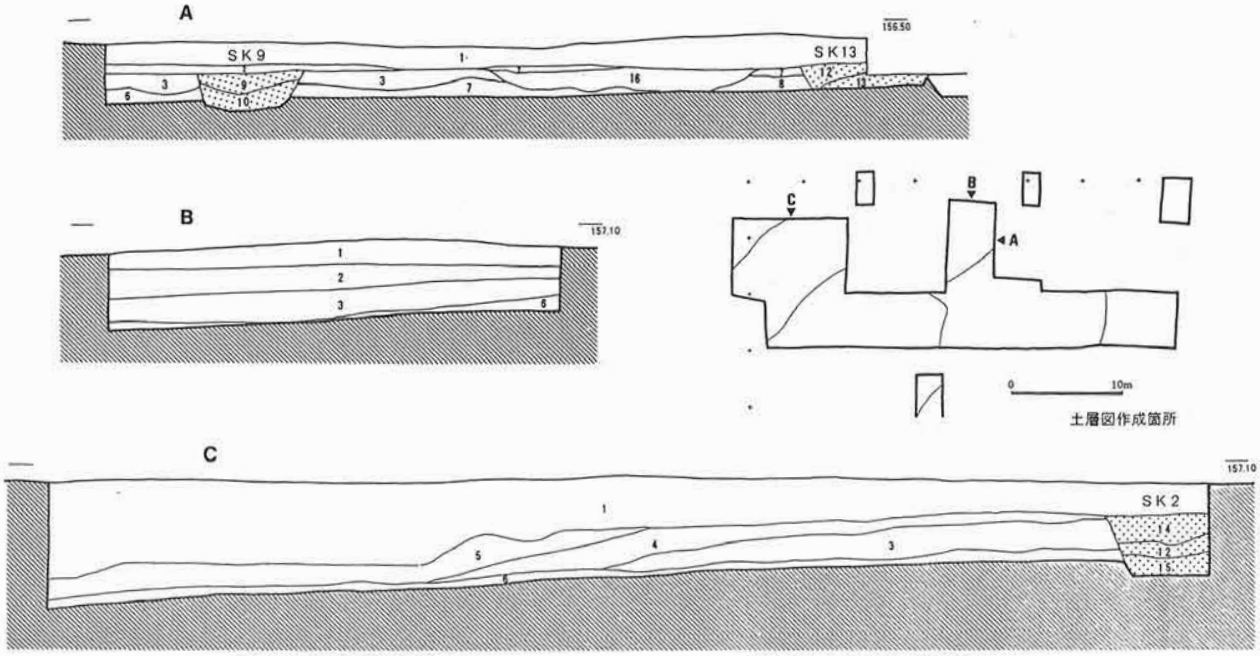
これらの土層の中で、第３層～第５層については、調査区の南東隅において谷地形特有の斜面堆積を示している。

遺構は、後述する土坑が、第２層の表土層直下でその掘り込みが確認され、現地形に近い状況で構築されていることが指摘される。また、SB01とした竪穴住居は、その周辺の削平が著しく、大沢ラピリ層（第７層）及び第８層をその確認面として検出している。なお、大沢ラピリ層は、旧地形を残すSB01辺りから南西部分一帯においてその残存が認められる。

＜文献＞

富士宮市教育委員会1993『富士宮市の遺跡』

富士宮市教育委員会1985『上石敷遺跡』



≪土層≫ ― 標準層序 ―

1．表土　（耕作土）

2．表土②　（耕作土）

3．黒色土　スコリアの混入が目立つしまり、粘性の弱い層。

4．黒色土　しまりの弱い層で、2～3㎜大のスコリア粒の混入が目立つ。

5．黒色土　4よりスコリアの混入が減る。

6．黒色土　（大沢ラピリ層漸移層）

7．黄褐色土（大沢ラピリ層）

8．黒色土　（クロボク層）黒色の強い層で、橙色スコリアを少量含む。

― 土坑 ―

9．黒色土　粒子が細かく、橙色スコリアが目立つ。

11．黒色土　粒子が粗く、スコリアの混入が少ない。

12．黒色土　しまりが弱く、黒色土ブロックの混入が目立つ。

13．黒色土　粒子が細かく、栗色土ブロックの混入が見られる。

14．黒色土　12よりスコリアの混入が増える

15．黒色土　2～3㎜大の黒色スコリアの混入が目立つ。

16．黒色土　しまりが強く、4～5㎝大のスコリア混入の黒色土ブロックが目立つ。

第７図　調査区標準土層図

第Ⅲ章　調査成果

1．遺構

発見されている遺構は、竪穴住居１棟、土坑15基、ピット６個である（第６図）。発掘調査区は、現代の畑地による土地の削平が進んで、４段の平地としての雛壇状の段となっている。それは、遺構の分布にも影響しており、標高の高い部分ほど削平が進んで、遺構の残存自体が不明瞭なものとなっている。

竪穴住居址（SB）は、調査区中央部にあり、周辺に同時期の竪穴住居が認められない単独の発見である。

土坑（SK）は、一定の規則性を持って、調査区の南西側斜面部で発見されている。それは径１ｍ前後の円形土坑が、地形の傾斜に沿って群構成を示す状況にある。

（1）　竪穴住居址（SB01）

Ｃ－５グリッドで発見された竪穴住居で、413cm×412cmの規模を測る隅丸方形の平面形を示す（第８図）。後出のSK13と近世陶磁器が出土しているSK15と重複関係にある（写真２）。

竪穴の覆土は、全体で17層に細分されるのものであり、意図的に埋め戻された状況が認められる。埋め方に一定の規則性は認められないが、竪穴北東側以外の壁付近に対して、埋め戻しに要する１回の土量が少ない細かい埋め戻しが実施されている様子が窺える。

竪穴住居の壁は、緩やかに立ち上がり、最も深い北東壁で深さ21cmを測る。竪穴住居の床面が地形に合わせて南東側に傾斜しているため、壁は南東側が良好な残存を示している。

床面は、栗色土まで掘り込んでおり、掘り方をほとんど構築しないで、直に床面としている。

柱穴は、径20cm程を測る楕円の掘り方で、深さ25cmを有する４本柱として発見している。柱の間隔が、長軸270cm、短軸で200cmを測るため、柱は、長方形の配列を示している。この配列に対して、その内側に棟持柱と思われる２本の柱穴が長軸方向で発見されている。この柱穴は、長軸45cm、短軸30～32cmを測る長方形の掘り方を示し、北西側に深さ10cm～15cmを測る浅い掘り込みを持つものである。柱自体に係る掘り方は、一辺30cmを測る方形で、深さ70cmの規模を測る。柱の底面には、径12cmを測る円形の硬化面が発見されており、柱のおよその太さとその位置が分かるようになっている。２本の柱は235cmの間隔を持つものである。

炉は、竪穴のほぼ中央部において発見されている。径30cmほどの比較的規模の小さなもので、深さ７cmを測る地床炉である。内部の焼土の堆積は少なく、使用頻度はそれほど大きくない。

SB01では、床面の中央部から南西側にかけて灰と炭化物が床面に薄く堆積している。これは、燃焼が著しく、全面に灰の分布として認められる。炭化物あるいは炭化材の割合は少なく、実際によく燃えている状況が分かるもので、竪穴住居の片付けにおける意図的な焼失行為が想定される。

発見されている遺物は、人為的な埋め戻し行為が行なわれているため、確実に遺構に伴うものはない。覆土中に含まれるものも土器の小破片が少量発見されている程度で少ない。その中で、特筆されるものが南東側の壁際で発見されている青銅製の腕輪（銅釧）の破片である。覆土中位からの出土で、竪穴の埋め戻し時に混入させている状況を窺うことできるものである。

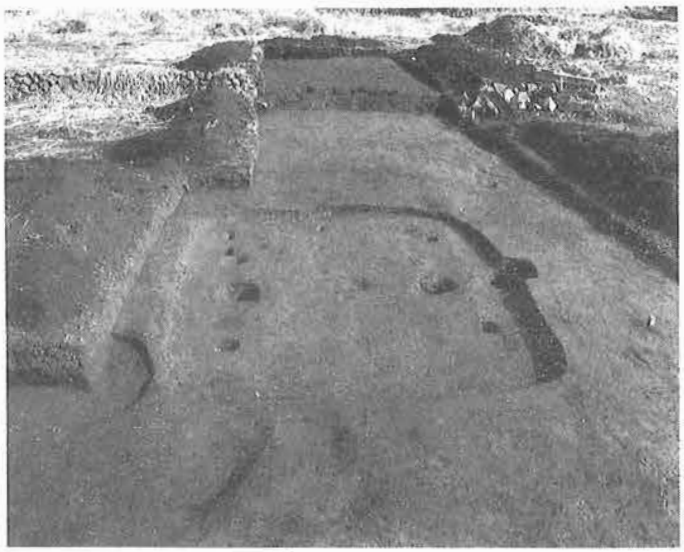
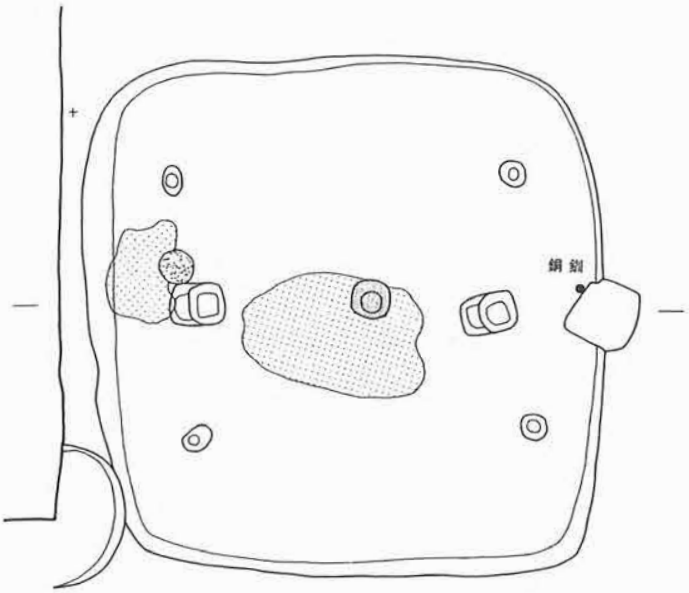
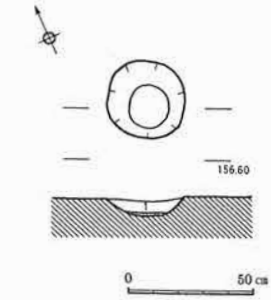


写真２　ＳＢ０１

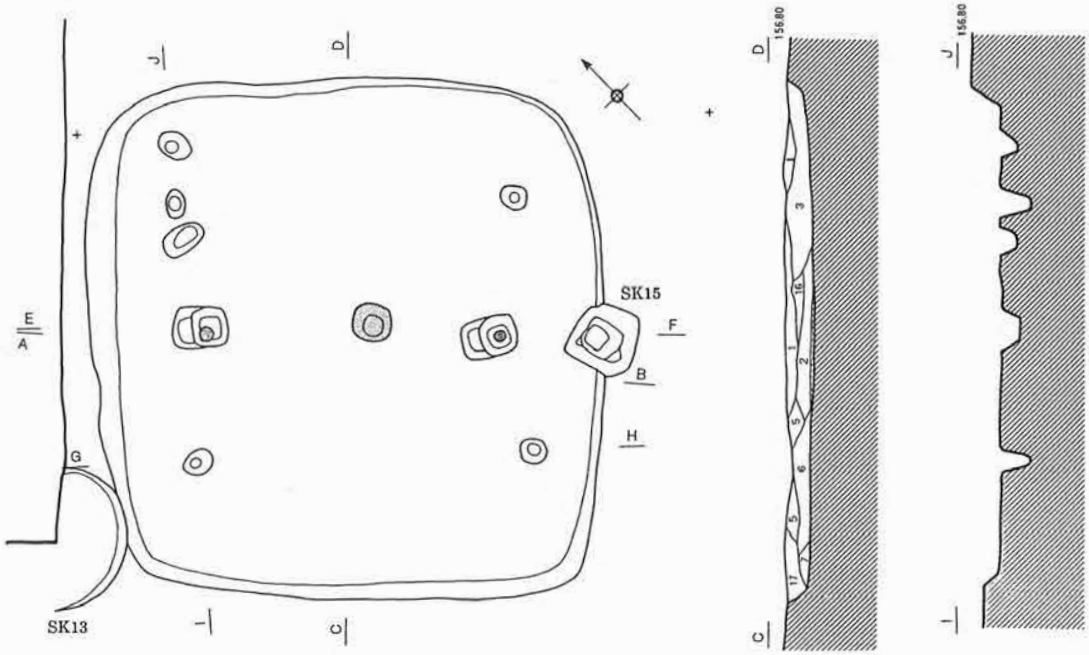


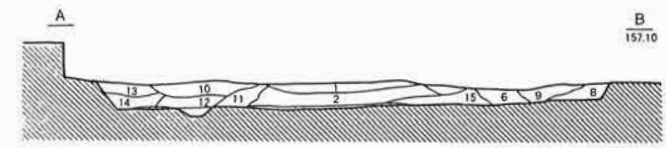
<遺物・炭化物出土状況>

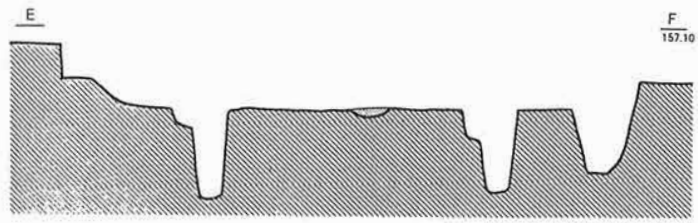


《土層》
1．白色土　灰、炭化物の混入が多い。
2．赤褐色土（焼土）

〔炉址〕





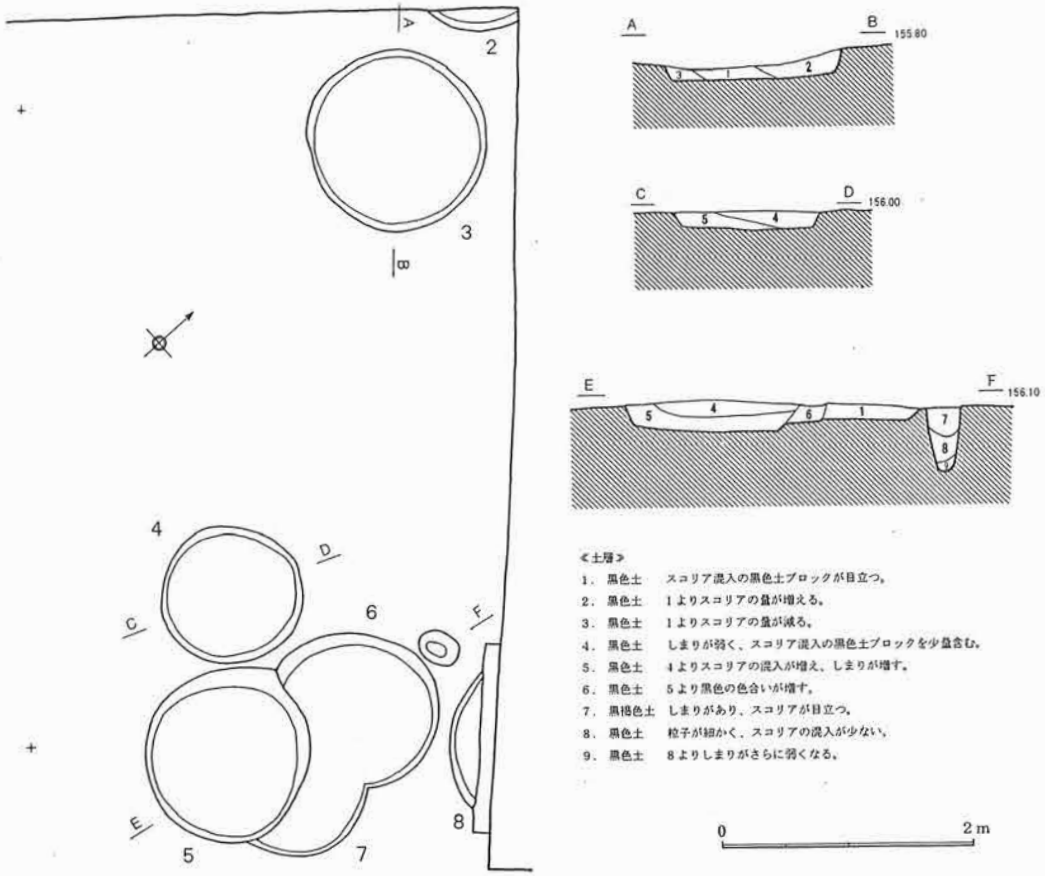


・炉址
・炭化物・灰
・硬化面

※15ページ・土層解説

0　2 m

第８図　ＳＢ０１実測図



第９図　ＳＫ２～ＳＫ８実測図

（２）　土坑（SK）

ⅰ．SK２～SK８

調査区の南西側Ｂ－２グリッド周辺で発見されている土坑群は、円形のもので構成されている(写真３)。SK２、SK３とSK４～SK８にそれぞれが集中している（第９図)。

SK２とSK３は30cmの間隔を開けて隣接する。SK２は、調査区域外に広がっており、調査区の南西壁部分において見られるその断面形では、深さ54cmを測る土坑となる。SK３は、径142cmを測る円形土坑で、遺構確認面から深さ23cmを有する。

SK４～SK８は、重複関係にあるSK５～SK７と隣接するSK４とSK８からなる土坑群である。SK５～SK７は、SK６→SK７→SK５の順で新しくなる。SK６の北側には32cm×25cmの大きさで、深さ51cmを測るピットが隣接している。

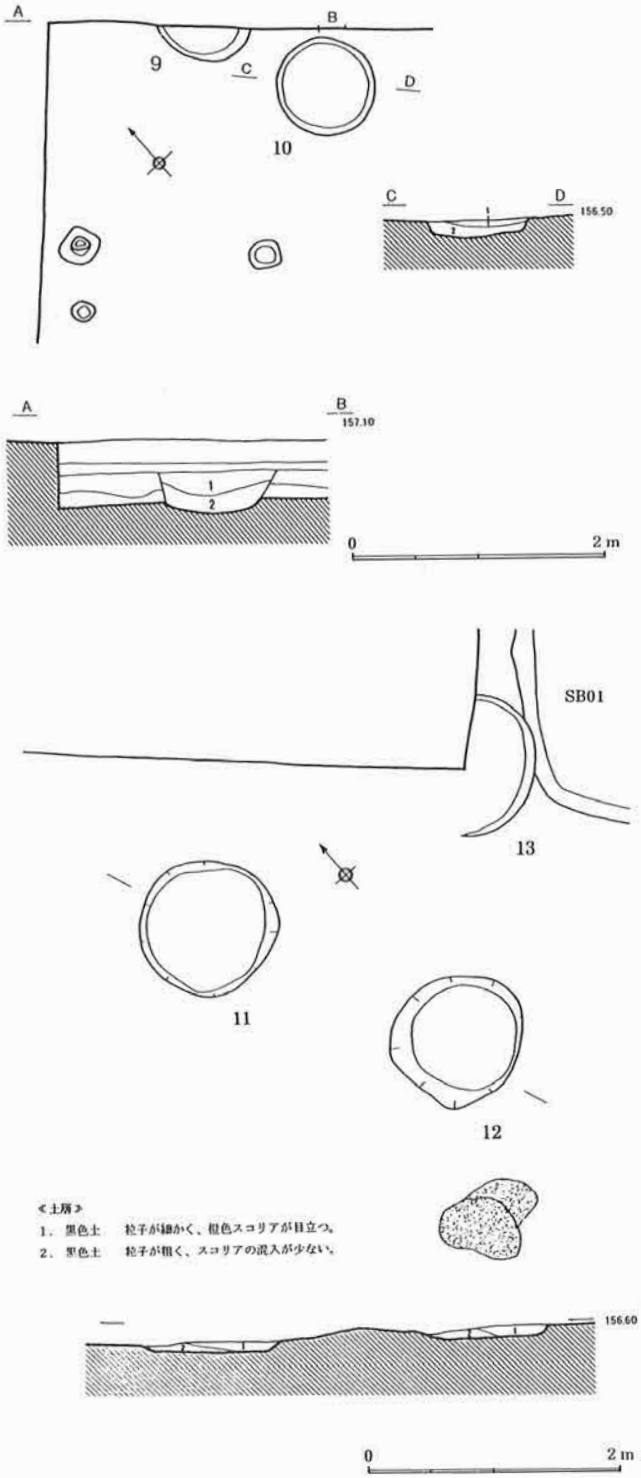
ここで取り上げた土坑は、いずれも自然堆積を示す覆土によって覆われている。

ⅱ．SK９～SK13

Ａ－４・５グリッドとＢ－４・５グリッドにかけて発見されている土坑群で、SK９～SK12が地形に合わせるように、列状に配置されている（第10図)。SK９は調査区の壁における断面形の数値で、深さ32cmを測る。

SK９とSK10の西側には、３個のピットは発見されている。径20cm～30cmを測り、最も北側のピットで、深さ56cmを測る。

SB01と重複関係にあるSK13は、径110cm、深さ22cmを測るものである（第７図・第10図)。表土の直下の掘り込みとしてSK２、SK９、SK13をそれぞれ較べてみると、その深さを違えており、いずれもその底面をクロボク層まで掘り込ませている。土坑の類似性は、その形状及び規模から指摘されるが、掘り込みの深さがクロボク層まで達するため、相互の形態的な違いとなる。これは、土坑内の埋設物などに影響された土坑の構築方法に係るもので、その底面を地質的な安定性が期待されない大沢ラピリ層を掘り抜く必要性あるいは、クロボク層まで掘り込んで構築する必要があったものと考えられる。



第10図　ＳＫ９～ＳＫ13実測図

iii. SK14

確認調査の際に発見された土坑で、Ａ－８グリッドに位置している（第11図）。径150cmを測る円形土坑で、今回の調査で発見された土坑の中では、最も大きい。確認面からの深さは、10cm程度で浅い。

iv. SK15

Ｃ－５グリッドで発見されている方形基調の土坑である（第12図）。SB01とその南東壁で重複関係にある(写真４)。

SK15は52cm×51cmの方形に掘り込まれており、深さ61cmを有する。底面も方形の形状で18cm×17cmの大きさを示している。壁は北側で直線的に立ち上がり、北西隅と南東側で一つ段を持って立ち上がる。東壁側では、拳大の８個の礫が土坑の中位以上に対して積み上げられており、壁状の面を形成している。

覆土は３層に分層されるが、いずれも人為的な埋め土である。

遺物は、埋め土である覆土第２層に含まれて、石英２点、瑪瑙１点と陶器の細片が１点発見されている。

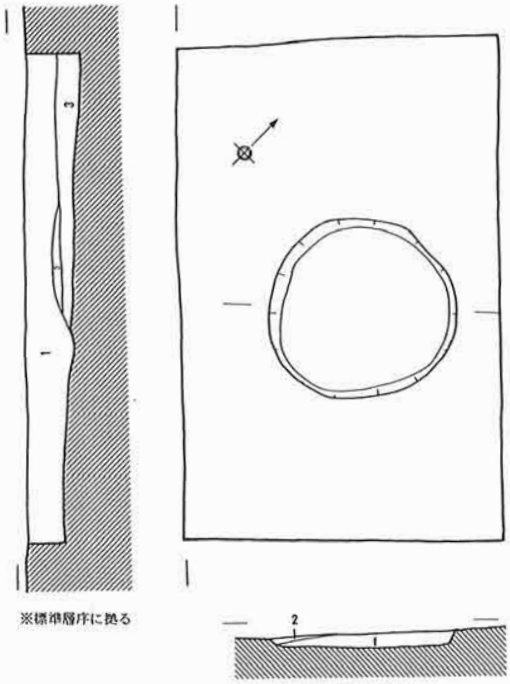
（３）ピット

Ｂ－２グリッドとＡ－４グリッド及びＣ－７グリッドにおいてピットが検出されている。それぞれの具体的な機能についてはよく分からない。Ｂ－４グリッド内のピットはSK６に近接して発見されている（第９図）。

Ａ－４グリッドには３個のピットが発見されている（第10図）。

Ｃ－７グリッドでは、現代の畑地で削平された平坦面の縁辺部分で２個のピットが発見されている。長軸で幅45cm～50cmを測り、深さ25cmを示す（第６図）。これらのピットに伴う遺物の出土はない。

写真３　ＳＫ２～ＳＫ８



≪土層≫ ― 土坑 ―
1．黒色土　粒子が細かく、橙色スコリアの混入が多い。
2．黒色土　粒子が粗く、スコリアの混入が少ない。

0　2 m

第11図　ＳＫ14実測図

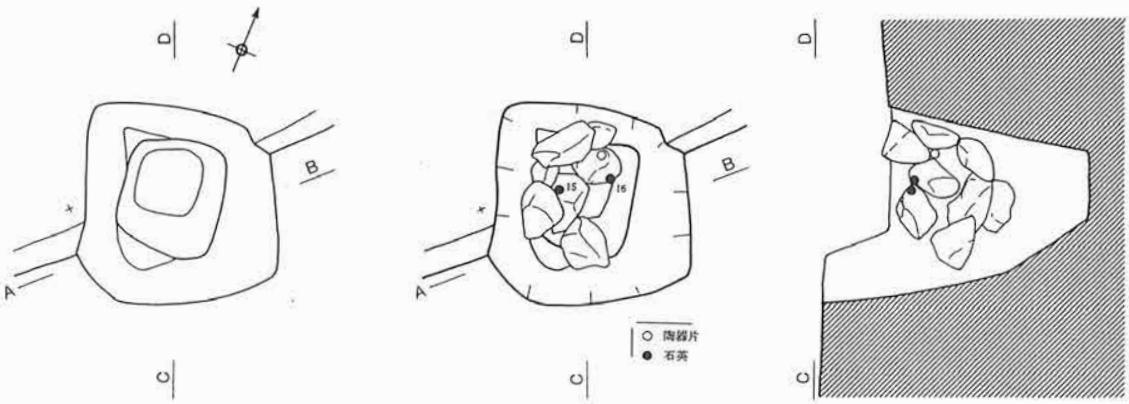
第２表　土坑一覧表

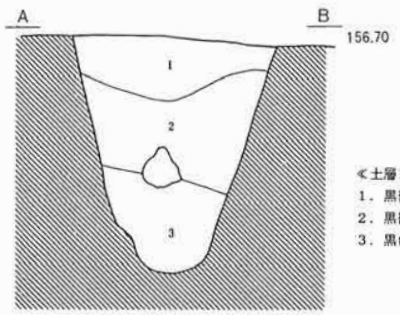
遺構名	形状	規模	深さ	備考
ＳＫ２	円形	(径128)	54	
ＳＫ３	円形	径142	23	
ＳＫ４	円形	径114	15	
ＳＫ５	円形	径127	24	ＳＫ5・6・7重複
ＳＫ６	円形	径135	12	
ＳＫ７	円形	(径117)	20	
ＳＫ８	円形	(径150)	15	
ＳＫ９	円形	(径82)	32	
ＳＫ10	円形	径80	16	
ＳＫ11	円形	径110	8	
ＳＫ12	円形	径108	10	
ＳＫ13	円形	径110	22	
ＳＫ14	円形	径150	10	
ＳＫ15	方形	52×51	61	石組・埋め土

（　　）は推定値　　〔単位：ｃｍ〕

※深さはＳＫ２、ＳＫ９、ＳＫ13以外遺構確認面からの値

写真４　ＳＫ15





≪土層≫
1．黒褐色土　しまりがあり、スコリアの混入がやや目立つ。
2．黒褐色土　栗色土、ロームブロックの混入が目立つ。
3．黒色土　　2に類似するが、粒子が細かくなる。
※すべて人為的な埋め土

0　50 cm

第12図　ＳＫ15実測図

2. 遺物

出土している遺物は、すべて破片資料で完形のものはない。土器、陶磁器、金属器などの出土が知られる（第13図・第14図）。

1～5はSB01の覆土中から出土している。同一の個体と思われる1と2は、弥生時代後期～古墳時代前期の壺で、肩部の破片である。刺突による擬縄文が見られ、東遠江の菊川式土器の影響が窺える。3は同じ時期の壺底部破片で底面に木葉痕を施している。4、5は近世の擂鉢の破片で19世紀代のものとみられる。遺構には直接関係ない後世の混入物である。

6～13は、発掘調査中に表土から出土した遺物である。6～9は中世の遺物で、6が渥美産の片口鉢の破片で13世紀のものと思われるものである。7が縁釉皿の口縁部破片で16世紀前半代のものである。8は当地域では出土例の少ない瓦質土器である羽釜の破片である。9は蓮弁文が見られる青磁の碗である。13世紀中葉～14世紀の年代が考えられる。

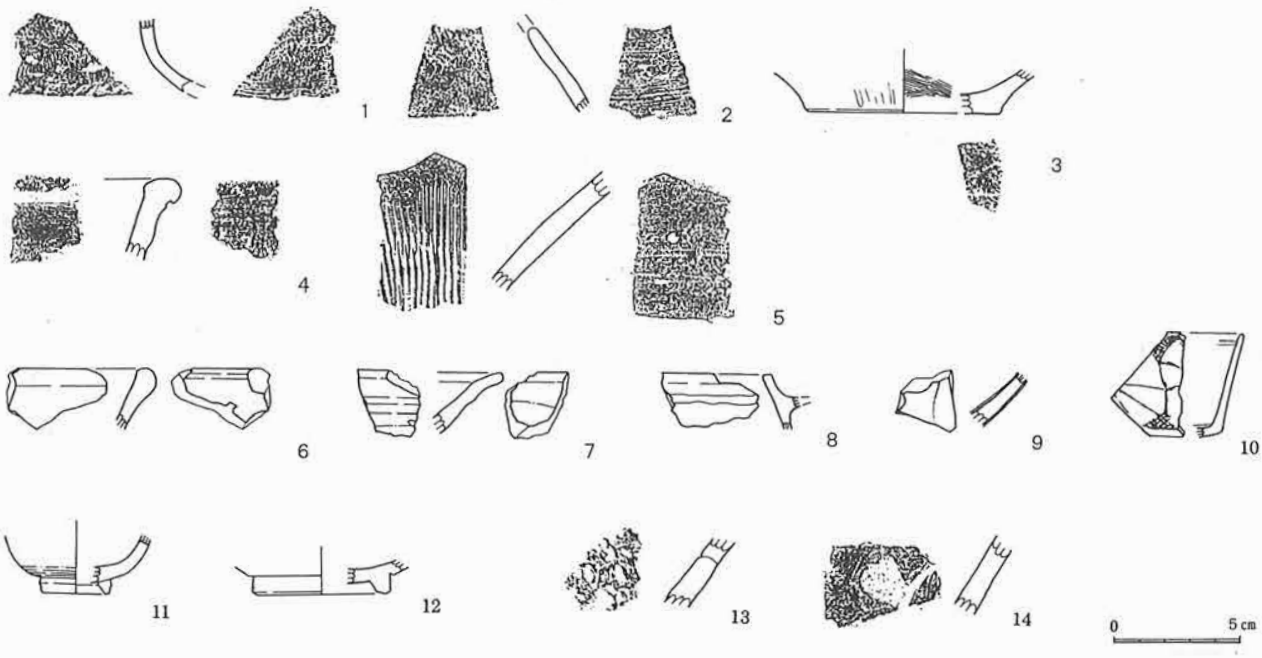
10～12は近世の陶磁器の破片である。染付の菊花文の見られる10が筒型碗で、11、12が陶器碗の底部破片で高台が付される。いずも18世紀中葉段階のものであろう。13は縄文土器の破片で、RLの大粒の縄文が見られる。14も縄文土器であるが、SB01の覆土中の出土である。外面に沈線文の一部が認められる。13、14は縄文時代後期に比定されるものと思われる。

15～17は、火打石に使用されたと思われる石製品の破片資料である（第14図）。15と16は石英質の同一個体と捉えられ、使用後あるいは土坑埋納に伴う破砕行為に関連すると思われる破断面が見られる。そのため、本来の火打石として使用されたと思われる部分の残りは少ない。17は幅1.8cmを測る瑪瑙製の破片で表面の剥離調整を施して形を整えており、側面を主体として使用の痕跡（摩滅）が認められる。

これらの火打石は、人為的な埋め戻しに伴うが、土坑構築時のものとして土坑内に埋納されたものと考えられる出土状況を示している。

18はSB01の覆土中層から出土した青銅製腕輪（銅釧）の破片資料である。全体の1／3程度が残存しており、銅板を環状にしているが、ゆがみが著しく弧状に円を描いていない。また、上下とも錆による腐食が進んでおり、その端部の稜が不明瞭である。残存長39mm、幅9mm、厚さ2mmを測る（写真5）。

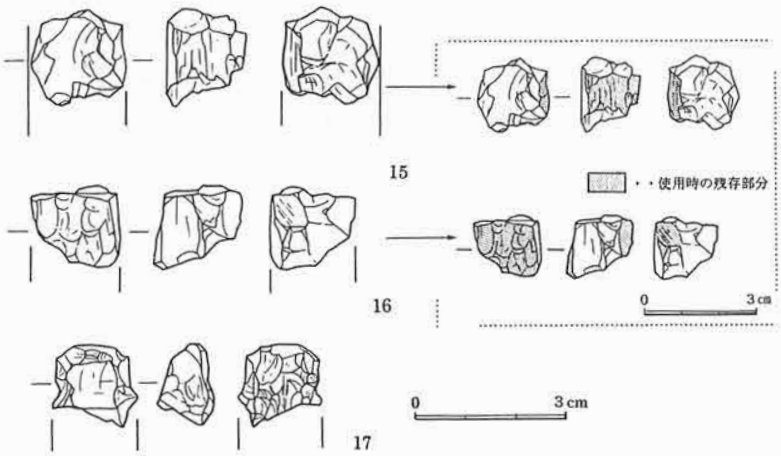
この銅釧は、SB01の廃絶時における竪穴の埋め戻し時において、埋め土内に混入させているものである。SB01の廃絶時の遺物として捉えられる。

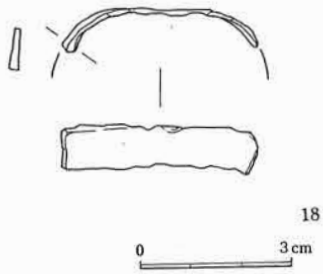


第13図　出土遺物実測図①

遺跡は、出土遺物から弥生時代後期～古墳時代前期、中世～近世の年代であることが分かるものの、遺構の年代については確実に伴うものがないため、明らかではない。遺構の数とともに遺物の数量が少ない点が、今回の調査におけるひとつの特徴である。遺跡全体の性格を間接的に表しているものと思われる。

写真５　ＳＢ０１出土の銅釧





〔火打石〕15・16（石英）17（瑪瑙）

〔銅釧〕18

第14図　出土遺物実測図②

第３表　遺物観察表

No.	出土地点	器種	法量	調整	特徴	備考
1	SB01	壺		外面　ヨコナデ・刺突文 内面　ヨコハケメ	胎土　1mm大の砂粒が目立つ 色調　浅黄橙色　焼成　普通	2と同一個体
2	SB01	壺		外面　刺突文 内面　ヨコハケメ(8本/cm)	胎土　1mm大の砂粒が目立つ 色調　浅黄橙色　焼成　普通	1と同一個体
3	SB01	壺	底径7.8	外面　タテミガキ 内面ヨコハケメ(8本/cm) 底部　木葉痕	胎土　黒色砂粒が目立つ 色調(外)淡黄色(内)浅黄橙色 焼成　普通	

（単位：cm）

No.	出土地点	器種	法量	産地	生産年代	備考
4	SB01	擂鉢		瀬戸・美濃	19世紀	
5	SB01	擂鉢		瀬戸・美濃	19世紀	
6	表土	片口鉢		渥美	13世紀	
7	表土	緑釉小皿		瀬戸・美濃	16世紀前	
8	表土	羽釜				瓦質土器
9	表土	青磁碗		中国	13世紀中～14世紀前	蓮弁文
10	表土	筒型碗		肥前	18世紀中	菊花文
11	表土	小碗	(底径2.7)	瀬戸・美濃	18世紀中	
12	表土	碗	(底径5.4)	瀬戸・美濃	18世紀中	

（単位：cm）

No.	出土地点	器種	法量	調整	特徴	備考
13	表土	甕		外面　縄文 内面　ヨコナデ	胎土　きめが粗く、白色砂粒が目立つ 色調　にぶい赤褐色　焼成　やや軟質	縄文土器
14	SB01	甕		外面　沈線文 内面　ヨコナデ	胎土　赤色砂粒、白色砂粒が目立つ 色調　浅黄橙色　焼成　普通	縄文土器

No.	出土地点	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量(g)	備考
15	SK15	火打石	石英質	17	19	16	5.3	16と同一個体
16	SK15	火打石	石英質	16	17	16	4.3	15と同一個体
17	SK15	火打石	瑪瑙	16	17	11	2.9	
18	SB01	釧	青銅	39	9	2	1.8	1/3存

法量は残存値（単位：mm）

≪第８図土層解説≫
1．黒褐色土　２～３mm大のスコリアの混入が目立つ。
2．黒色土　栗色土ブロック、黒色土ブロックを含む。
3．黒色土　10cm大の黒色土ブロックの混入が目立つ。
4．黒褐色土　１に類似し、スコリアの混入が目立つ。
5．黒褐色土　４に類似し、黒色土ブロックが目立つ。
6．黒色土　５～６cm大の栗色土ブロック、黒色土ブロックが目立つ。
7．黒色土　しまりが強く、黒色土ブロックが目立つ。
8．灰褐色土　しまりが弱く、スコリアの混入が少ない。
9．黒褐色土　しまりが弱く、２～３cm大の栗色土ブロックを含む。
10．黒褐色土　しまりが強く、橙色スコリアの混入が目立つ。
11．黒褐色土　粒子が粗く、２～３mm大のスコリア粒が目立つ。
12．黒色土　粒子が細かく、栗色土の混入が目立つ。
13．黒褐色土　10に類似し、栗色土ブロックを含む。
14．黒色土　栗色土ブロック、黒色土ブロックを少量含む。
15．黒色土　２～３cm大の栗色土ブロックが目立つ。
16．黒色土　ロームブロックの混入が目立つ。
17．黒褐色土　５に類似し、栗色土ブロックが目立つ。
18．白色土　しまりが弱い炭化物と灰の層。

※１～17は人為的な埋め土

第Ⅳ章　総　括

1．発見された遺構

今回の調査で、特に注目されるのは、SB01とした竪穴住居址の発見であろう。この遺構は、通常の掘り方を構築しない点や棟持柱と思われる特異な柱穴の存在、また、住居の廃絶後、意図的に埋め戻されていることなど、特徴的なものである。通常の掘り方が形成されない点は、竪穴住居の中央部で発見された炉の使用頻度が少ないことなども踏まえると、一般的な生活にあまり使用されなかった施設なのではないかと想定される。SB01の周辺に竪穴住居が分布しない点もその特殊性が影響しているのではないだろうか。

さらに、柱穴の掘り方が小規模であまり深くない四本柱と堅固な作りの棟持柱は、その施設の特殊性をさらに明確にしている。これらの柱の配列を考えると、この施設が切妻造りとなる家屋の構造が考えられるものであり、通常、想定される竪穴住居とは大きくその構造を違えていると言える。梁を支える柱より棟木を支える２本の柱を深く地中に埋めている。

棟持柱の存在から竪穴住居の入口部は、南西壁あるいは北東壁側に設けられたものと考えられる。また、炉址が通常は竪穴住居の入口部から見て、その反対側に寄せて構築するのに対して、ほぼ、中央に位置するのは、切妻の屋根の構造と柱の位置が大きく作用しているものであると思われるのである。

このような特殊な構造を持つ古墳時代前期の竪穴住居の事例は、駿河など周辺地域において、その発見例がない。さまざまな住まいの形式が見られる古墳時代には、棟持柱を持つ掘立柱建物の登場が駿河～伊豆地域においても明らかになるが、それは神殿などの機能が考えられる高床式の建物であり、竪穴状の施設には直接関連付けられものではない。

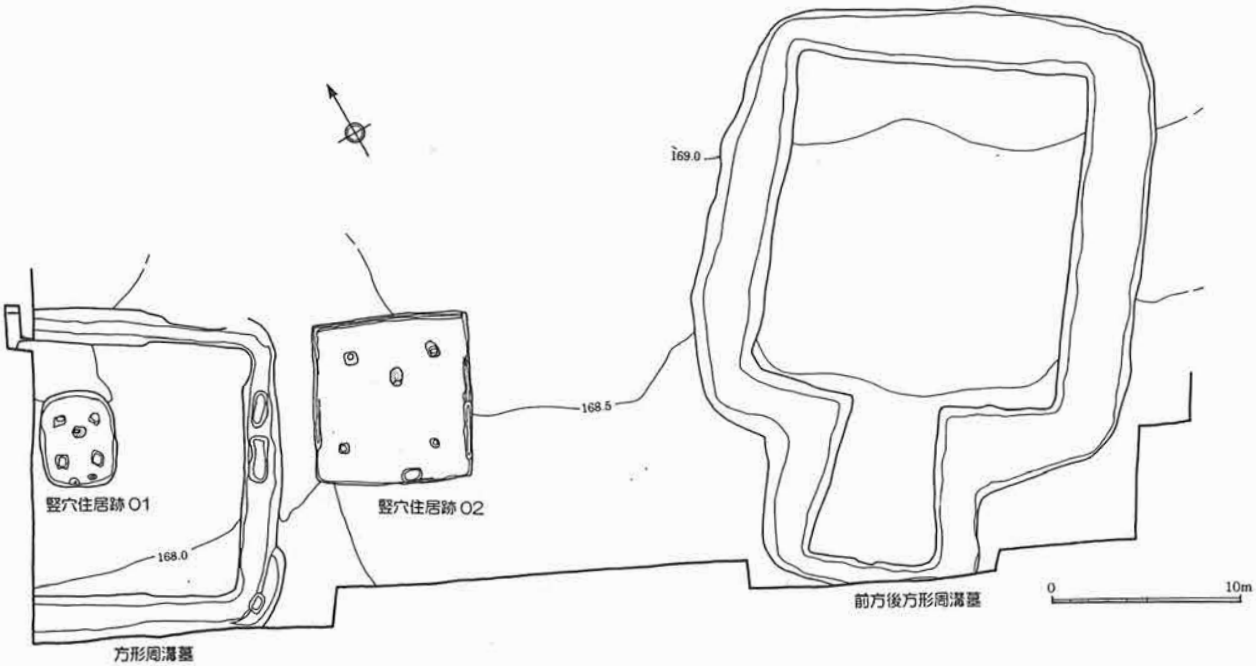
2．発見された遺物

SB01は、前述のように、人的に埋め戻された竪穴住居である。そのため、一般生活に係る遺物の出土が見られないのは自然であろう。また、竪穴住居の片付け行為が実施されたことにより、竪穴住居そのものに係る遺物の出土も見られないのである。

このような、竪穴住居の廃絶が実施されたSB01において発見された遺物では、竪穴の埋め戻しに際して、埋め土の中に入れられた銅釧の出土が重要となる。

銅釧は、帯状銅釧と呼ばれるものの一部破片である。同様の類例は、弥生時代後期中葉と古墳時代前期前半に盛期を迎える潤井川中流域における拠点的な集落を形成していたと思われる富士宮市泉遺跡で発見されている破片資料に続いて富士地区において２例目である。弥生時代後期～古墳時代前期に係る銅釧の発見は、帯状銅釧主体的分布域のひとつである駿河～伊豆の地域で、静岡市登呂遺跡や沼津市雌鹿塚遺跡、伊豆の国市山木遺跡など弥生時代後期前半代の遺跡での発見例が多く、海岸部や沖積平野部に展開する遺跡での出土が目立つ（静岡県1992）。今回のような丘陵部の遺跡からの出土は極めて珍しいが、それが時代差を反映している可能性がある。

弥生時代後期に丘陵部での開発が明確になるのは、足高・尾上遺跡群と呼ばれる愛鷹山麓における遺跡群のような弥生時代後期の後半段階になってからである。潤井川流域においても、沖積地内の泉遺跡で弥生時代後期中葉に環濠が廃絶する頃、丘陵部において月の輪上遺跡や滝戸遺跡に対する進出が始まる。これは、富士根地区でも弥生時代後期の後半に石敷遺跡の丘陵部における登場が知られるのである。三ッ室遺跡が同地域として弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺跡分布域にあることなどを踏まえると、銅釧は弥生時代後期後半段階以降のものであると考えられる。



第15図　丸ヶ谷戸遺跡全体図

3．遺跡の年代

今回の発見された遺構・遺物から考えられえる遺跡の年代は、火打石を埋納しているSK15のような近世の遺構によって判断されるように江戸時代の開発の痕跡として確認されている。また、中世も少量の遺物であるが出土し、遺物の分布域が想定される。

この実態は、富士根地区において、石敷遺跡や丸ヶ谷戸遺跡などでも認められることで、この段階の遺構・遺物が、この地域においてやや目立った出土を示しているのである。

SB01とした竪穴住居址の年代については、今回の調査において、最も問題となる視点である。遺構に伴う遺物が存在しないことで適切な年代設定ができるものではないが、周辺に展開する遺跡における発掘調査の情報から一定の予測がなされるものである。

三ッ室遺跡の西側には、全長26m程を測る前方後方形周溝墓が発見されている丸ヶ谷戸遺跡が広がる。この遺跡では、地点を違えて居住域と墓域が発見されおり、古墳時代前期前半に登場する特異な遺跡の一部の様子が判明している（富士宮市教育委員会1991・2001）。遺跡は弥生時代後期の後半まで遡る可能性があり、関連しそうな竪穴住居址も発見されている。それが時代の変遷の中で、その画期に呼応する形で前方後方形周溝墓や方形周溝墓が登場し、新出の墓域を形成するのである。

遺跡の画期を経て居住域から墓域へと姿を変えているわけであるが、丸ヶ谷戸遺跡発見の竪穴住居跡01は、その動向に合わせて、方形周溝墓の構築のために意図的に埋め戻されている竪穴住居なのである（第15図）。この住居から出土している遺物は、第16図のように広口壺と高坏の脚部である。１は、器面がハケメ調整の後ヨコナデにより整形されている広口壺であり、赤彩の痕跡を認めることができるものである。頸部以上の破片であるものの、頸部の屈曲が明瞭

第16図　丸ヶ谷戸遺跡竪穴住居跡01出土土器実測図

で、胴部が口縁部の径を大きく凌駕する点を踏まえると、古墳時代前期の中で捉えられるものと思われる。同時に出土している２の脚部は、脚部内面以外の赤彩が顕著で、低脚のものであり、中部高地系の一例ではないかと考えている。これらのことから、この遺構については、古墳時代でもその初源期のものとして捉えられる。

このように、丸ヶ谷戸遺跡では、古墳時代前期前半において、地域の再編が行なわれ、大きく変貌する段階があったのではないかと想定されるのである。その再編は、地域首長の墓を含む墓域の経営として具現化するのである。この地域開発の中に今回発見されたSB01も同調しているとすると、その年代は古墳時代前期前半段階として捉えられ、この地区が大きくその姿を変える前段階の竪穴住居であったと言えるのである。

丸ヶ谷戸遺跡と三ッ室遺跡の関係は、第Ⅱ章でも説明したように、富士山から派生した谷地形を挟んで隣接する遺跡であり、同じ程の高さに位置しているものである。これらを含む一帯が、古墳時代前期において、新たな開発の場として選択される。SB01の構造的な特徴は、それをよく表しているのである。それがある時点で地域的な再編を受けて前方後方形周溝墓の登場となるわけであるが、丸ヶ谷戸遺跡では、墓域の形成が判明しているのに対して、三ッ室遺跡においてはどのような開発が実施されたのかはよく分かっていない。この地域における今後の重要な調査課題である。

４．おわりに

発掘調査において古墳時代前期に係る遺構については、この遺跡の位置する地域的な特性を踏まえて検討しなければならない。静岡県東部～伊豆にかけての古墳時代前期前半における拠点的な遺跡が形成されるのは、伊東市西小学校遺跡、伊豆の国市山木遺跡、清水町熊之免遺跡、富士宮市丸ヶ谷戸遺跡などの遺跡を中心とした地域である。これらは、外来系土器の顕著な出土を示す遺跡で、各小地域で交易の中心地となるものである。これらは、海上交通の要衝となる西小学校遺跡、肥沃な平野部が展開する熊之免遺跡や山木遺跡など、その立地もそれぞれ遺跡の性格を反映するもので、主な生業を違えている。

山間地にある丸ヶ谷戸遺跡や三ッ室遺跡の場合、その生業となるものを特定することは難しいが、古墳時代前期前半に積極的な地域開発の実施が想定させるものとなっており、地域的な拠点を形成しているのである。その新たな時代の始まりを通して、今回の発見された竪穴住居址や銅釧の登場が位置付けられるのである。

丸ヶ谷戸遺跡の特殊性は、月の輪平遺跡に見られる一般的な集落の状況とは、大きく異なるものである。その違いが遺跡間の格差へと繋がっている。丸ヶ谷戸遺跡の持つ拠点的な集落遺跡として広がりは、この三ッ室遺跡まで及ぶものと想定すると、SB01の性格の一端が浮き彫りにされるように思われるのである。

丸ヶ谷戸遺跡で発見されている東海西部の色彩が強い前方後方形周溝墓を地域共同体における首長層の墓と考えると、今回発見されて銅釧自体も首長層あるいは司祭者層の装身具としてその関連が想像される。但し、帯状銅釧は、天竜川以東の東海東部にその主体的な分布域を持つもの（鈴木2006）である点を考えると、丸ヶ谷戸遺跡の墓制とはうまく整合してはいない。

富士山西南麓で古墳時代前期前半に首長層の住む拠点的な集落が営まれた背景にある共同体の姿相を考える際には、墓制や土器様式の実態、金属器の状況など多角的な検討が必要となるものである。

＜文献＞

静岡県 1992『静岡県史』資料編３考古三

鈴木敏則2006「東海の弥生土器と青銅器」『2004年度共同研究成果報告書』財団法人大阪府文化財センター

富士宮市教育委員会 1991『丸ヶ谷戸遺跡』

富士宮市教育委員会 2001『丸ヶ谷戸遺跡Ⅱ』

報告書抄録

書名（ふりがな）	三ッ室遺跡（みつむろいせき）
副書名	宅地分譲造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	富士宮市文化財調査報告書
シリーズ番号	第38集
編著者名	渡井英誉
編集機関	富士宮市教育委員会 〒418－8601　静岡県富士宮市弓沢町150番地 TEL0544－22－1111（代） e-bunka@city.fujinomiya.shizuoka.jp
発行年月日	2007年６月30日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町	遺跡番号					
三ッ室遺跡（みつむろ）	富士宮市（ふじのみやし） 小泉字（こいずみあざ） 三ッ室（みつむろ） 1381外	22207	市22 県93	35° 13’ 31”	138° 38’ 04”	20070205 ～ 20070219	295㎡	宅地分譲造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三ッ室遺跡	集落	古墳時代前期 中近世	竪穴住居 土坑	土器・銅釧 陶磁器・石製品	古墳時代前期の棟持柱を持つ竪穴住居址と銅釧の発見

富士宮市文化財調査報告書　第38集

三　ッ　室　遺　跡

－宅地分譲造成工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成19年６月30日

編集　富士宮市教育委員会
発行　富士宮市教育委員会
〒418-8601
静岡県富士宮市弓沢町150番地
(0544) ２２－１１１１㈹
印刷　三扇美術印刷株式会社
〒418-0056
富士宮市西町１番15号
(0544) ２６－３６３６㈹